

センター概要



当アレルギーセンターは、呼吸器・アレルギー内科、小児科、耳鼻咽喉・頭頸部外科、皮膚科、眼科が各診療科の壁を乗り越え力を合わせ、よりよい治療を皆様に提供いたします。

相談窓口

●近畿大学病院 アレルギーセンター相談窓口 **Tel.072-288-7222** (内線1278)
メールアドレス arerugi-senta@med.kindai.ac.jp

対象疾患(カッコ内は主な担当科)

- 気管支喘息および類縁疾患(呼吸器・アレルギー内科)
- アトピー性皮膚炎などのアレルギー性皮膚疾患(皮膚科)
- 食物アレルギー、薬剤アレルギーなどの原因精査と専門治療(皮膚科、小児科・思春期科)
- アレルギー性結膜炎、春季カタルなどのアレルギー性眼疾患(眼科)
- アレルギー性鼻炎(通年性、季節性)、好酸球性副鼻腔炎、好酸球性中耳炎(耳鼻咽喉・頭頸部外科)

アレルギー複合疾患を有する症例、および難治性アレルギー性疾患についてはアレルギーセンターで合同症例検討を行い、精査、加療を行います。

アレルギーセンター メンバー医師紹介

センター長 東田 有智(呼吸器・アレルギー内科)
副センター長 佐野 博幸(呼吸器・アレルギー内科)

榎本 明史(歯科口腔外科)
竹村 豊(小児科・思春期科)
佐藤 雅子(皮膚科)
安倍 大輔(耳鼻咽喉・頭頸部外科)
岩橋 千春(眼科) 2025年12月1日現在

病気の理解を深め、治療効果を高めるための充実した患者教育プログラム

アレルギー疾患の知識を深めるための市民公開講座(年1回 2021年度実績)

研究・教育・啓発その他

- アレルギー疾患の予防・予知治療に関する調査・研究
- アレルギー疾患の病態解析と臨床研究
- アトピー性疾患・アレルギー性疾患の専門医療スタッフの教育、育成(医療従事者向け講習会年1回 2021年度実績)

アレルギー疾患ポータルサイト(外部リンク)

<https://www.jsa-pr.jp/index.html>(日本アレルギー学会)
<https://allergyportal.jp/>(アレルギーポータル)

近畿大学病院 KINDAI UNIVERSITY HOSPITAL <https://www.med.kindai.ac.jp/>

診察日程と紹介方法

近畿大学病院アレルギーセンターへの紹介

1.対象疾患の専門分野が明らかな場合

- 当該診療科へ紹介診療
対応日【月～金】

お気軽にご相談ください

2.対象疾患の紹介先が不明な場合

- 近畿大学病院 地域連携

Tel.072-288-7222「アレルギーセンター受診希望」(内線1278)

- 近畿大学医学部 呼吸器・アレルギー内科
東田 有智【火】 佐野 博幸【月・水】

検査

- 気管支喘息:各種アレルギー検査、呼吸機能検査、精密肺機能検査、気道過敏性テスト、呼気NOの測定(気道のアレルギー性の炎症の評価)、呼吸抵抗測定:IOS(Impulse Oscillometry System)、運動誘発検査、高分解能CT検査(喘息に類似した病気の鑑別に有用)、FACSスキャン(リンパ球の種類を詳しく調べる検査)、ACTH負荷副腎皮質予備能検査
- 食物アレルギー:食物負荷試験、皮膚テスト
- アトピー性皮膚炎:各種皮膚テスト(皮内テスト、プリックテスト、光テスト、パッチテスト、誘発テスト)、皮膚生検
- アレルギー性鼻炎、好酸球性副鼻腔炎:鼻汁中好酸球測定、血清中抗原特異的IgE濃度測定、鼻茸組織内好酸球数測定、副鼻腔CT
- アレルギー性結膜炎:細隙灯顕微鏡検査

栄養部からのご案内

安全安心な食事について

当院では、医師の指示のもと管理栄養士が栄養バランスや患者さまの病状に合わせて献立を作成し、衛生管理の面でも入院中に安心して召し上がっていただけるお食事を提供しています。また、食欲不振などの症状がある方には希望がございましたら、管理栄養士が病室へ訪問し、ご相談のうえ、調整を行わせていただきますので、医師・看護師にお気軽にお声がけ下さい。

病院食のアレルギー対応について

食物アレルギーのある患者さまには、入院センターや入院時にアレルギーの内容や程度をお伺いしています。その内容をもとに、管理栄養士がアレルギーを除外した献立を個別に作成しています。またシステムを利用するなど、アレルギーが確実に除去されるよう、チェック体制を整え、安心して召し上がっていただける食事を提供しています。

栄養指導について

食物アレルギーをお持ちの患者さまには、代替食品のご提案や必要最小限の食物除去を行いながら、適切な栄養を確保するための栄養指導を行っています。ご希望の方は主治医へお気軽にご相談ください。

ソーシャルメディア一覧



LINE

お友だち登録はこちら



アレルギーセンターだより

近畿大学病院広報誌

2025年12月発行

【発行】近畿大学病院アレルギーセンター 〒590-0197 大阪府東市南区三原台1丁14番1号 TEL 072-288-7222 (内線1278)

近畿大学病院
KINDAI UNIVERSITY HOSPITAL

アレルギーセンターだより



CONTENTS

代表的アレルギー疾患のご紹介

- 気管支喘息
- 歯科金属アレルギー
- 食物アレルギーとアナフィラキシー
- アトピー性皮膚炎
- アレルギー性鼻炎
- アレルギー性結膜炎

はじめに

現在、国民の約3人に2人は気管支喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、花粉症、アレルギー性結膜炎、食物アレルギーなどのアレルギーに罹患していると言われ、このような患者数の増加が社会問題となっています。また、アレルギー疾患は一度発症すると、複数の臓器にアレルギー疾患を合併しうることや、新たなアレルギー疾患に罹患することが特徴であることから、内科、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科など多岐にわたる診療科が専門的な知識と技能を提供するだけでなく、包括的な治療を患者および地域や社会に提供する必要が求められています。

これら拡大するアレルギー疾患の問題に対応すべく、「アレルギー疾患対策基本法(平成26年6月成立:平成27年12月施行)」が発効されました。このように定められた施策に対応するために、**近畿大学病院では平成29年にアレルギーセンターを設立し、呼吸器・アレルギー内科、小児科、皮膚科、耳鼻咽喉科、眼科の各専門医による臓器特異的アレルギー疾患、および多臓器に及ぶ複合的アレルギー疾患の診療と**

治療に対応し、アレルギー疾患の基幹病院として活動しています。また、**当センターは平成30年6月1日から大阪府アレルギー疾患医療拠点病院に指定されています。**

令和7年11月には近畿大学病院は大阪狭山市から堺市泉が丘駅前に新築移転しました。引き続き近畿大学病院アレルギーセンターでは専門医・看護師・薬剤師・栄養士・臨床検査技師など多職種が連携し、患者さん一人ひとりに合った総合的なケアを提供いたします。また、アレルギーに関する正しい知識を広めるため、府民の皆様向けの講座や相談支援にも力を入れてまいります。本パンフレットがアレルギーにお悩みの方やご家族の皆さまにとって、少しでもお役に立てれば幸いです。今後とも地域の健康を守るため、より良い医療の提供に努めてまいります。どうぞお気軽にアレルギーセンターをご利用ください。

近畿大学病院 病院長 **東田 有智**
アレルギーセンター長

近畿大学病院 アレルギーセンター https://www.med.kindai.ac.jp/allergy_center/





気管支喘息

呼吸器・アレルギー内科担当医師
佐野 博幸

◆ 喘息とは

気管支喘息は、空気の通り道である気道が狭くなることにより、「ゼーゼー」、「ヒューヒュー」と鳴ったり、息が苦しくなったり、咳を繰り返す疾患です。これは、気道に慢性的な炎症が存在するために、気道の反応性の亢進(ちょっとした刺激で気道の反応が起こる)と可逆性の気道閉塞のためにこのような症状が起こります。これらの症状は夜間から早朝に起こりやすく、軽い症状のものから、ひどくなると死ぬほど苦しい症状のものまであります。症状が軽くても何度も繰り返しているとならば重症化して気道の状態が完全には元に戻らなくなるので注意が必要です。喘息の気道の炎症はアレルギーによるものが基本であり、小児喘息のほとんどの人でみられますが、成人ではアレルギー以外にも感染や喫煙による気道の上皮の障害などが原因となって発症する人が増えてきます。

◆ 喘息と遺伝

アレルギーによる気道炎症が基本となっている喘息は、ある程度の確率で遺伝すると言われています。両親ともにアレルギー性の喘息があると、50~80%の子どもに喘息が遺伝し、お父さんかお母さんのどちらかに喘息がある場合は30%、両親ともなければ10%程度であるといわれています。ただし、喘息の素因が子供に伝わったとしてもすべての人が発症する(喘息の症状が出る)わけではありません。この遺伝的素因と住環境、大気汚染、ストレス、食生活などの環境要因の両方の影響で発症すると言われています。

◆ 喘息は治るかとの疑問

小児喘息は思春期になると治るとよくいわれています。事実、約60%の小児喘息患者さんは思春期までにほぼ無症状になりますが、一度治ったと思った子供の約半数は大人になって再発します。これに対して、大人になって

喘息を発症した成人喘息では、その90%が慢性的に経過し、治療で症状はなくなっても完全に治る(治療)ことはありません。したがって、喘息は、一生つき合っていく必要のある「慢性の病気」であることを自覚して、治療を継続することが大切です。

◆ 喘息の治療

喘息は気道の炎症があるために気道反応が亢進して、気道が閉塞する病気です。この炎症を最も効率的に抑えるのが「吸入ステロイド薬」であり、喘息治療の中心となります。また、ロイコトリエン受容体拮抗薬も気道の炎症を抑制することに有用です。そして、気道が狭くなっていれば長時間作用型の気管支拡張薬(β2刺激薬 and/or抗コリン薬)の吸入薬を併用しますが、吸入ステロイド薬と長時間作用型気管支拡張薬の配合薬を吸入することが一般的です。これらの薬を使っても症状が治まらない、あるいは増悪を繰り返す重症の喘息では、近年、アレルギーの抗体であるIgEや炎症を起こすIL-4/IL-13やIL-5、TSLPといった物質を抑制する生物学的製剤が使用されます。

◆ 当院での喘息の検査

当院では、喘息の確定診断、長期管理のためにスパイロメトリー、気道可逆性検査、気道過敏性試験、強制オシレーション法といった呼吸生理検査と、気道炎症の程度を測定する呼気一酸化窒素濃度、喀痰好酸球数を測定しています。また、アレルギー検査として血清IgE測定や皮膚テスト、また、肺の形態検査として高分解能CT検査などを行っています。以上、当院では喘息に関するあらゆる検査、治療が可能ですので、喘息でお困りの際は受診いただきますようお願いしています。



参考URL <https://www.erca.go.jp/yobou/zensoku/index.html>



歯科金属アレルギー

歯科口腔外科担当医師
榎本 明史

◆ 歯科金属アレルギーとは

金属アレルギーと聞くと、ネックレスやピアスなどで皮膚にかぶれが出るという症状を想像されることが多いかと思います。口腔内の歯科治療で使われている金属が原因となって、顔や全身にアレルギー症状を発症することもしばしば見られ、これを歯科金属アレルギーといいます。歯科金属アレルギーの症状は、口腔粘膜炎や舌炎、口唇炎など口腔内の症状だけでなく、手や足、全身にも炎症が生じることもあり、「なかなか治らない全身の蕁麻疹が歯科金属アレルギーとわかり、その金属を除去したら症状が治った。」というケースもあります。

◆ 歯科金属アレルギーの原因

口腔内の歯科金属は常に唾液にさらされ、これがイオンとなり溶け出し、抗原となってIV型アレルギーの形で、反応が出現するとされています。現在の歯科治療で使用されている金属は、金銀パラジウム合金が主流であり、その主成分としては、金、銀、パラジウム、銅等となっています。様々な調査においてもやはり、金とパラジウムによるアレルギー反応が多いことが報告されています。また、ニッケル、クロムもアレルギー陽性率の高い金属元素とされており、これは取り外しの義歯や歯科矯正用の装置に含まれていることが多いです。

◆ 検査・診断

口腔内にどのような金属が使用されているかを口腔内チェックやレントゲンなどにて検査します。また、

歯科金属アレルギー自体の検査には、金属アレルギーのパッチテストを行うことが一般的です。試薬のついたパッチシールを体に貼り、皮膚の変化をチェックし、所見をもとに、アレルギーがあるかどうかの判断をします。この検査は、当院では皮膚科に依頼し実施しています。

◆ 治療

歯科金属アレルギー反応の原因となっている金属が特定できれば、まずは口腔内から原因物質を取り除くことから始めます。治療では、仮の歯などで、口腔内や全身に出ている症状が改善するかを観察していきます。治療するまでに数か月以上と、とても時間がかかることも少なくないことから、定期的な経過観察が必要となります。症状の改善が確認できれば、アレルギーを示さない安全な材料(レジン・チタン・セラミックス・ジルコニア等)を慎重に選んだ上で修復します。場合によっては、自費治療となることもあります。

◆ 予後

治療後も症状の変化を経過観察する必要があります。金属のアレルゲン除去完了後も長期間にわたり症状の変化を観察し、再発防止のために新たに歯科治療を実施する場合は注意するようにします。また、歯科金属のみならず歯周炎などの慢性炎症も全身のアレルギーの原因となることもよく知られており、口腔内全体を総合的に診察していくことが必要です。



参考URL <https://www.jda.or.jp/park/relation/metalallergy.html>



食物アレルギーとアナフィラキシー

小児科学教室
竹村 豊

◆ 食物アレルギーってどのくらいいるの？ どんな食品が原因になるの？

食物アレルギーは、おとなよりも子どもに多く、小学生～高校生では20人に1人ほどいるといわれています。おとなでも最近では増えており、海外でも報告があります。原因となる食べものは、子どもでは卵・牛乳・クルミが多く、おとなではエビ・カニなどの甲殻類や果物がよく見られます。

◆ どんな症状が出るの？ アナフィラキシーってなに？

食物アレルギーは、特定の食べもの(アレルゲン)を食べたあと、免疫が過剰に反応して症状が出る病気です。主な症状は、

- 皮ふの赤みやじんましん
- せき、ゼーゼーする呼吸
- おなかの痛み、嘔吐 など

アナフィラキシーは、こうした症状がいくつも同時に急に進む状態で、命に関わることもあります。治療にはアドレナリンを使い、危険がある人には自己注射薬(エピペン®)を処方します。今後は点鼻薬タイプも登場予定です。

◆ 最近のトピックスは？

1. クルミアレルギーの増加

クルミによるアレルギーが増え、2023年に特定原材料(表示が義務のある食品)に追加されました。輸入量の増加が関係していると考えられています。

2. 食物蛋白誘発胃腸症(FPIES)

食後1～4時間で強い嘔吐が起こるタイプのアレルギーで、アナフィラキシーにはなりません。こどもでは卵黄や牛乳、おとなでは魚介類が原因になることがあり、胃腸炎や食中毒と間違われやすいため注意が必要です。

◆ 近畿大学病院アレルギーセンターでは？

当センターでは、

1. アレルギー症状への対応

2. 食物経口負荷試験

を中心に診療しています。

アナフィラキシーリスクのある方にはエピペン®の処方や誤食時の救急対応を行い、24時間体制の救急外来でいつでも受診が可能です。また、食物経口負荷試験では、

- 本当にアレルギーがあるか
- どのくらいの量が食べられるか

を確認します。多少リスクはありますが、実際に食べて確かめることが大切です。

食物アレルギーについて心配なことがありましたら、どうぞお気軽に近畿大学病院アレルギーセンターへご相談ください。



参考URL <https://allergyportal.jp/knowledge/>



アトピー性皮膚炎

皮膚科担当医師
佐藤 雅子

アトピー性皮膚炎は、増悪と軽快を繰り返すそう痒のある湿疹を主病変とする疾患です。患者さんは他のアレルギー疾患にもかかることがあります。日本人の罹患率は、小児期が13～10%、20歳代が10.2%、30歳代が8.3%、40歳代が4.1%、50+60歳代が2.5%です。近畿大学は東京大学などと共同研究として報告しました。

乳児期のアトピー性皮膚炎患者さんは、顔面、頭部にそう痒をともなう湿疹反応が生じやすくなります。幼児期や学童期になると、頸部、肘窩、膝窩などにそう痒をともなう湿疹反応が生じてきます。思春期や成人期では、顔面、頸部、胸部、背部など上半身に病変部が生じやすくなります。いずれの時期でも、病変部が全身に拡大して重症化することがあります。

近畿大学病院では患者さんごとの臨床症状や生活習慣を確認し、患者さんの希望を尊重して診療しています。

初診時、皮膚の症状やかゆみにともなう精神的ストレスの評価や、血液検査などを実施します。皮膚症状やストレスの度合い、症状の経過などから重症度を判断します。接触皮膚炎や悪性リンパ腫、疥癬などアトピー性皮膚炎に似た皮膚疾患があります。パッチテストや皮膚生検、検鏡などいくつかの検査を追加し、正しい診断を心がけています。

診療は患者さんごとの悪化因子の検索と対策を基本としています。また、スキンケア、アレルギー反応や痒みの制御を行います。炎症部位のアレルギー

反応を抑える目的でステロイド外用剤や免疫抑制作用のある外用剤を用います。皮膚の乾燥を防ぐ目的で全身にワセリンなどの保湿剤をさらに外用します。抗ヒスタミン剤内服はアレルギー反応と痒みを抑制します。

重症患者さんには教育プログラムにもとづく入院診療を実施し、生活習慣の改善とスキンケアの方法を指導しています。入院療法は悪化因子に対し、強力な対策をたてることができます。医師の指導のもとで適切なスキンケアを実践していただきます。多くの患者さんはアトピー性皮膚炎が良くなることを実感してもらえます。

また重症患者さんには注射薬や内服薬、紫外線による治療も適応となることがあります。特に一定期間外用剤治療で効果が乏しい場合は、生物学的製剤という注射薬やJAK阻害薬という内服薬をご紹介します。是非ご相談ください。

近畿大学病院アレルギーセンターでは、喘息などさまざまなアレルギー疾患を併発している患者さんに、それぞれの分野に精通した医師が連携して統合的に診療しています。また、地域の先生とも連携して診療しています。受診を希望される患者さんは地域の先生からアレルギーセンターへご紹介いただくようお願い致します。症状が落ち着き、患者さんが希望されましたら、地域の先生に紹介させていただきます。

気になることがございましたら、近畿大学病院アレルギーセンターまでお問合せください。

参考URL <https://allergyportal.jp/knowledge/atopic-dermatitis/>





アレルギー性 鼻炎

耳鼻咽喉・頭頸部外科担当医師
安倍 大輔

アレルギー性鼻炎は、くしゃみ・水様性鼻汁・鼻閉を主な症状とするアレルギー疾患です。季節性アレルギー性鼻炎(スギやヒノキなど、飛散期のみ)に症状が出るものと通年性アレルギー性鼻炎(ハウスダストやダニなど年中にわたって抗原のあるもの)に分けられます。

1998年・2008年・2019年 有病率



松原 篤ほか:鼻アレルギーの全国疫学調査2019(1998年、2008年との比較):速報—耳鼻咽喉科医およびその家族を対象として—、日耳鼻 2020;123:485-490,より

検査は鼻咽腔ファイバー検査・鼻汁好酸球検査・血液検査・誘発テストなどがありますが、主に行われるのは鼻咽腔ファイバー検査と血液検査です。鼻咽腔ファイバー検査は、鼻粘膜の色調や腫脹の程度により評価します。血液検査は、どのような抗原でアレルギー反応が起こっているかを調べることができます。

治療は①抗原回避・除去、②薬物療法、③手術療法、④免疫療法があります。

◆ 抗原回避・除去

スギやヒノキなどに対しては、マスク・眼鏡などで抗原からの暴露を避けることが大切です。ダニやハウスダストに対してはこまめな室内の清掃や除湿を行うことが大切です。

◆ 薬物療法

薬物療法は、症状に応じて様々な内服薬や点鼻薬を併用する治療です。眠気などの副作用が強く、運転などに制約が出てくる場合がありますが、最近では眠気を軽減させた薬剤も開発されています。

◆ 手術療法

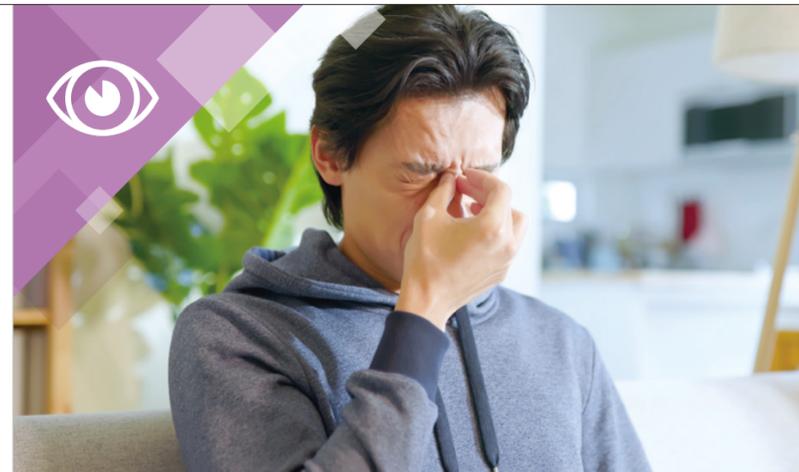
鼻中隔彎曲症や肥厚性鼻炎などの鼻腔形態異常によって鼻閉症状がある場合には、鼻中隔矯正術や下鼻甲介手術を行います。鼻汁分泌を支配している後鼻神経を切断する手術も適応となります。

◆ 免疫療法

抗原が判明している場合に、その抗原を少しずつ投与することで症状の軽減を図り、アレルギー症状を抑える治療です。以前は皮下注射で行っていましたが、スギとダニのアレルギーに対しては、舌下投与で治療できるようになりました。また、重症のアレルギー性鼻炎にはIgE抗体に対する治療も適応であり、2週または4週ごとに自己注射治療を行っています。



参考URL http://www.jiaio.umin.jp/common/pdf/guide_allergy2021.pdf



アレルギー性 結膜炎

眼科担当医師
岩橋 千春

◆ 症状

アレルギー性結膜炎は花粉やハウスダストなどのアレルゲン(アレルギーの原因物質)が目の表面に付着し、結膜(白目やまぶたの裏側)でアレルギー反応をおこすことで炎症が生じる病気です。結膜への抗原侵入により肥満細胞からの化学伝達物質(ヒスタミン、セロトニン、ロイコトリエンなど)が遊離することによって、毛細血管拡張、血管透過性亢進が起こり、結膜炎症状が出現します。主な症状は目のかゆみで、そのほか、流涙、眼脂、充血、異物感、充血、眼瞼腫脹などがあげられます。

◆ 検査

まず問診で、症状の出方や時期などを確認します。花粉症の場合には季節性に、ハウスダストやダニの場合には通年で症状がみられます。アレルギー性結膜炎のアレルゲンを特定するための特異的な眼科での検査法はありませんが、血液検査や皮膚テストなどの結果が参考となります。

◆ 予防・治療

予防としては、アレルゲンにできるだけ触れないようにすることが大切です。通年性のアレルギーの場合には、ハウスダスト対策として、こまめに掃除を行い、床やカーペットなどのダニやハウスダストを減らすこと、空気洗浄機の使用により空気中のハウスダストを減らすことが有効です。季節性の場合には、花

粉の飛散が多い時期には、外出時に眼鏡やゴーグル、マスクを着用すること、帰宅後に服や髪の花粉をはらうこと、帰宅後に手洗い、うがいにより花粉を洗い流すことなどが有効です。

治療の中心は点眼治療で、第一選択としては、抗アレルギー点眼薬(抗ヒスタミン薬、メディエーター遊離抑制薬)を使用します。花粉症の場合には、症状が出る前(花粉の飛散開始の数週間前)から点眼を始めることで症状を軽くする効果が期待できるとされています。それでも症状が治まらない場合には、ステロイド点眼薬を使用します。ステロイド点眼薬は眼圧が高くなるなどの副作用があるので、使用時には定期的な眼科検査、診察が必要です。

原因となる主な花粉・物質など

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
スギ												
ヒノキ												
イネ科												
ブタクサ												
ヨモギ												
通年性	ハウスダスト・ダニ・ペットの毛など											



参考URL <https://allergyportal.jp/knowledge/allergic-conjunctivitis>